
蛇に嫁入り

九九ノ字 佳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蛇に嫁入り

【Nコード】

N0591Z

【作者名】

九九ノ字 佳

【あらすじ】

いつも通りの毎日を過ごしていたはずの私はどこで間違ったのか蛇に嫁入りするみたいです。——人と妖怪の少し歪んだ恋愛話、第2です。

大嫌い

なんて嘘

好きだから

‘アヤトリ

私は少し……いや、かなり天の邪鬼な性格だ。

大切な人に大嫌いって言うてしまうほどに
思ってることと言っていることが逆になることが多い。

そんな私でも私を受け入れてくれる大切な友達がいる。

少し天然な神社の跡取り娘の 天道 はなは と

少し怖がりな医者の娘の 涼風 さち の二人だ。

出会いは偶然だったけど今じゃあ、一緒にいることが当たり前になっている。

さちが行方不明になったと聞く前はこの友情に終わりがあんなんて信じてなかったんだ。

その日は、いつもより蛇をよく見かける日だった。

別に山の近くに住んでいるわけでもないけど

なぜか小さい頃から蛇をよく見ていたから珍しくも無かった。

だけど、その日は

心の中をかき回されるような不愉快な気持ちになったんだ。

まるで監視されているように感じたんだと思う。

蛇に監視されてるなんて、可笑しいこと言ってるけど。

もしかしたら自分も。

何て心配していたからそんな風に感じたのかもしれない。

そしてその心配は的中した。

色とりどりの

宝石も

価値がわからないなら

ただのごみ

・アヤトリ

学校から家に帰っている途中、ふと視線を感じて私は立ち止まった。いつもは気にしないのになぜか今日に限って気になってしまったのだ。

人通りが少ない道だからか視線を感じる方を振り返ってみるとすぐに誰が見ていたのかわかった。

そこにはニヤニヤと笑う男の人がいた。

ぞわりと不快感が心のなかに溢れてくる。

その人はこの町の中で明らかに浮いている着物姿で
首に赤い目のような水晶のついているチョーカーをつけている。

その男の人の緑のショートヘアは普通はあり得ない色で染めている

のかもしれないな、と心の中で思った。

全てにおいてどこか人と違う彼。

私が何より嫌だったのは蛇と同じ鋭い金の目で私を見ていたことだ。

「何か用ですか？」

駄目だとわかっていても問いかけてしまう。

男の人は気味悪く笑ったまま

「あんだ、無防備だって言われない？」

逆にそう聞き返してきた。

馬鹿にされた気分だった。

まるで今、自分がここに居るのは間違ってるって言われた気がした。

こんなことならさっさと帰ればよかったと思いながらその男を睨むと

「俺みたいな怪しい奴に声かけられたら普通、走って逃げねえ？」

大きく一歩こちらに足を踏み出して男は言った。

ビクツと体が強張ったが強がって

「べ、別にあんたくらいならすぐ逃げれるもん」

そう言ってしまった。

可愛がって

可愛がって

いたぶり

遊ぶ

・
アヤトリ

「べ、別にあんたくらいならすぐ逃げれるもん」

そう言ってからすぐに後悔した。

男と女の力の差や体格の差から私が逃げられるわけなんて無い。

今、走って逃げたならまだ助かるかもしれないけど

足がうまく動きそうになかった。

何で素直になれないんだ。と心の中で自分を叱りながらも私は相手を睨むのをやめなかった。

男は距離をゆっくりつめてくる。

私が強がっていることなんて男にはわかりきった事らしく

私との距離を二、三步でつめられるほど近くなったとき

男は少し呆れたように

それでも笑顔のまま言った。

「あなたって馬鹿だよ。こんなときは誰かに助けを求めなきゃ、すぐに食べられちゃうよ?」

そんな風に言われてから私はふと思った。

さつきから男の言葉が私を心配しているようにしか聞こえないのは気のせいだろうか、と。

そう思っただけで考え込んでいたせいか、私は男に何も言わなかった。男は何も答えない私を不思議がったが、そこにはふれずに続けて言う。

「この頃、蛇をよく見かけるだろ?あれはあなたを見るためだったけど気づいてなかったろ」

まるで、男がその蛇に命令していたかのような言葉に私は眉をひそめる。

男は気にせず、笑っていた。

「馬鹿らしい。あなたの話には付き合いきれません」

出来る限り冷たく聞こえるように私は男に言ったが

男は私がそう言うのをわかっていたかのように

すぐに言葉を返してきた。

「駄目だ。あんたは俺の花嫁になるんだから俺の忠告は聞け」

子供に言い聞かせるような声音でそう言った彼を

私は信じられない思いで見た。

誰が、誰の花嫁だって？

聞き間違いかと思ったが男は言い直すこともせず笑ったまま。

私は本当に厄介な人に関わったらしい。これは詐欺か何かだろうな。
とそう決めつけて

私は心の中でため息をついていた。

その出会いが私の平凡だった毎日を変えるなんて
誰が想像できるだろうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0591z/>

蛇に嫁入り

2011年12月3日16時53分発行